

はジウムテンノの陵のあるウネビヤマが中央にあつて、その先には山々が雲の如く連つて居るのである。

朝まだきまたも人力車で舊知奈良へと戻つた。観音はわがハセを去つたのを喜んだであらう、わが來るときは寺の僧侶等は仕事を怠けて、終日わが肩の方から覗込んだり、口を開いてわが顔を見たりして居たからである。これが五月の九日で、カスガ公園の藤の花が今を盛りと咲いて居るのを發見した。藤の花は薄紫の花束を垂下げて、宛ら檜と杉の老木から瀧が流れて居るやうで、其下には若楓がある。最もわが意を得た處は、綠草を縫ふて流れる清流があつて、兩側にある木は皆藤で、花が盛に咲いて居る。こゝはまた閑寂の地で巡禮者や旅人の跡がないので廻りにたかられる憂がない。稀に人が見ゆれば、それは薪採りや蕨折りの女や小供である。日本では蕨を葉の開かない内に折つて茹で、醬油で煮て食するのである。

奈良で仕事をすれば澤山ありながらも、こゝを出立しやうとしたころは、藤花は既に散つてしまつた。それに寫生地を更へた方が良策であるので、また宿でも、ビハ湖畔のヒコネに古園があると聞いたので、そこへ行かうとしたのである。荷物や何かを準備して明朝出發する筈にした。もしやまた寫生し残した處でもあるまいかと、寺院や公園を廻つて見て、ミカサヤマへ上つた。頂上には平らな芝地で、天氣が好いので遊山に來た人々も處々に居つた。頂上からは、キツガワに沿ふて奈良一帯が見える。山々に草が一面にあつて風馴れのしない松の木があり、

谷間は躑躅が燃ゆるやうな花を附けて居る。遂にこの景色の捨難くて、また二三日を延べしたが、怠勝ちの爲めに好題目も畫板に上らなかつたのは恨みであつた。

(此項完)

## 石神井の池

江 覽

甲武鐵道荻窪停車場で降りて北の方約一里 下石神井村といふに大なる池がある。シヤクジ井ノイケと呼ばれて、紅葉に名高き瀧の川の水源で、溢れて流るゝ清き水は、初めは幅一間程の石神井川となり、練馬を過ぎ板橋を過ぎ王子を過ぎ春は里の童に摘まれて流さるゝ紫雲英蒲公英、秋は風に誘はれて自ら散りゆく枯葉もみぢ葉を泛べて、終には豊島村のほとりにて隅田川に入るのである。氷川神社の鳥居の前を左に、少しゆきてダラノと下ると辨天島で、中に小さな堂がある。朽ちたる橋を渡つて北の方を見ると、周圍十町程の池の對岸は直黒な杉林で、東の小丘は稍大なる松の並木が風情を添えてゐる。水は深く清く、杉の影の暗く映したる上に浮草の葉のところ々、濛える、枯芦茂き中より水禽の鳴音連りに、時には羽搏きにつれて二羽三羽水の面を蹴りて走れる、あるはまた五羽六羽高く飛びて間もなく靜に舞ひ下るのものもある。更に岸を傳ひて杉林の方へゆき見れば、東南高き丘にある氷川の森は屹として一段の威嚴を添へ、恰も他の景色に對する感がある。此地は往々に稍不便ではあるが、其代り靜かで邪覺するものもないから、志ある人は一度三脚を据えて見給へ。